

茜色の歌姫



第五部 法隆寺炎上



法隆寺（奈良県斑鳩町）

是の冬に、（中略）斑鳩寺に災けり。（中略）一屋も余ること無し。大雨ふり雷震る。

（『日本書紀』卷第二十八）

天皇、臥病したまひて、痛みたまふこと甚し。ここに、蘇我臣安麻呂を遣して、東宮を召して大殿に引き入る。（中略）天皇、東宮に勅して鴻業を授く。乃辞讓びて曰はく、「（中略）願

はくは、陛下、天下を挙げて皇后に附せたまへ。仍、大友皇子を立てて、儲君としたまへ。臣は、今日出家して、陛下の為に、功德を修はむ」とまうしたまふ。天皇、聴したまふ。即日出家して法服をきたまふ。(中略) 或の曰(い)はく、「虎に翼を着けて放てり」といふ。

『日本書紀』卷第二十八)

第五章 吉野の雪 671

大路の突き当たりには、回廊に囲まれた内裏の宮が聳えていた。

回廊の門をくぐると、百官が政務を行う朝堂院の建物が東西に並び、それを過ぎるとさらに土塀が東西に広がり、天皇が住まう内裏と朝堂院とを区切っている。

土塀の中央に穿たれた南門より裡へ、舍人、伴部が入ることは赦されていない。

大海人皇子は、馬を舍人に預け、門前に立つ衛士に長剣を差し出し、独り門をくぐって歩んだ。幅一町(約100メートル)、奥行き二町の朝廷に、内裏正殿が建っていた。そのさらに塀に遮られた奥に、天皇とその后や妃、女孀どもの起居する寢殿が建っている。

寢殿の門前には、蘇我果安と中臣金が出迎えに立っていた。

皇子の前に拝礼した果安と金は、立ち上がると、

「まずは、倭媛皇后の室へ」

と、傍らに拝跪する二人の舍人を指した。

「これより奥は、彼等が案内し奉る」

百濟人か……。貌を上げた二人の、高い頬骨を見やって大海人皇子は呟いた。内裏に仕える舍人、女孀には、百濟人が多いとは聞いていた。しかし、彼等の面差しの強張りは、金や果安と同じであった。

「諾」

大海人皇子は頷いた。二人の舎人は立ち上がり、皇子に背を向け、寢殿の門を開けた。

その十日ほど前。

近江の倭媛皇^{やまとひめのおおきみ}后より書^{ふみ}が届けられた。是非にも近江に来たり、天皇を訪^{おと}ないたまえ、と記されてあった。

「行くべきではない」

舎人どもは口々に言った。

「近江の置始^{おきせめのひと}比等よりも報^{しら}せが来ている。蘇我安麻呂^{そがのやすまろ}曰^{いわ}く、蘇我果安、中臣金等、なにごとかを謀^{はか}りつつあり、と」

大海人皇子は、否、と首を横に振った。

「内裏を血で穢^{けが}すはずもあるまい」

「かつて……」

村国男依^{むらくにおより}は言った。

「板蓋^{いたがせのみや}宮で、葛城皇子^{かつらぎのみこ}らが蘇我鞍^{そがのくらつら}作^{さく}を討^うった例もあり」

二十六年前のその日、村国男依は皇子に随^{したが}い、雨の降りしきる板蓋宮にいたのだ。

「男依よ」

大海人皇子は笑みを含んで静かに言った。

「確かに、大友皇子の側近どもは、この機^{われ}に吾^{われ}を討^うとうと謀^{はか}っているであろう。されど」

身を乗り出し口を開こうとする男依を制し、皇子は続けた。

「あの折と、此度^{こたび}では、異なるものがひとつだけある」

息を詰めて応えを待つ舎人どもに、大海人皇子は言った。

「あの折は、額田^{ぬかたのいらつめ}郎女は葛城皇子らに組みして鞍作^{くらつら}を討^うった。此度は……」

額田郎女は、討たれるべき吾らに組みしている。

「信じようぞ、郎女を」

通されたのは、天皇の寢^ね屋^やであった。

室に入るなり、大海人皇子は足を止めた。悪臭が、鼻を突いた。

室の壁は、百体の仏像でびっしりと埋め尽くされていた。さまざまな貌^{かお}の仏像が見下ろす中、天皇は褥^{むしろ}に坐し、眼差^{まじり}しを虚空^{こゝろ}に彷徨^{さまよ}わせ、半ば口を開き、唇の端^はから涎^{よだれ}が垂れていた。

下の始末も、自ら行えないのか……。おそらく襠^{むつき}褌^{はかま}を当てているであろう、腰のあたりを見やっつて、皇子は息を吐いた。

天皇の傍らに座す倭媛皇后が、入ってきた大海人皇子を見上げ、頭^{こゝろ}を垂れて拝礼した。

天皇の御前に膝を突き、床に額をつけた皇子を、天皇は一瞥^{いちべつ}したまま、もどどおり、いざくともなく惚^{ぼろ}けた眼差^{まじり}しで見詰めた。

「今日は、御心地よけれど……」

皇后が眼差^{まじり}しを伏せて言った。

「夜ともなれば、熱を発し、うなされ、ただ一言を何度もつぶやきたまい……」

よふい、と。

よふい。麗姫。

鏡郎女のことを、天皇はかくも気に病んでいたのか……。

俯く皇子に、皇后は続けた。

「医人の見立てでは、あと一月と……」

皇子は、皇后を見やった。まっすぐに背を伸ばし、毅然とした面差しで、皇子を見つめていた。かの木幡が……。讚良とともに、蹴鞠の技を見せよとせがんできた乙女の頃、口の端に唾をためてわめく讚良の傍らで、ひたすら笑みを浮かべて黙っていた木幡は、いまや、自らの一言一言が、国の行く末を左右することを心得ていた。

「皇子よ」

皇后は、ちらと扉を見た。その向こうには、皇子を案内してきた舎人どもが聞き耳を澄ませているはず。皇子は、膝を進めて皇后ににじり寄った。皇后は声を潜めた。

「天皇がされて後、吾は称制を止め、しかるべき方に、高御座を譲る」

貌を上げようとして、皇子は思いとどまった。硬く、俯いたままであった。

「高御座を譲るべきは誰か、皇子の意を問いたい」

皇子は、ゆっくりと貌を上げた。常と同じく、涼やかな皇后の面差しがあった。

「皇后よ」

再び床に額をつけ、皇子は言った。

「天皇は、いまだ生きておわす。ここに語るは不敬である」

「然り」

皇后は立ち上がった。

「なれば、吾が寝屋にて」

扉を開け、天皇の寝屋を出ると、二人の舎人が、こちらに背を向けて立っていた。皇后は静かに廊を歩み始めた。皇子もそれに随った。二人の舎人は、その後を追った。

皇后の寝屋は、天皇の寝屋の隣であった。自ら扉を開け、皇子を招じ入れた。扉の外に残された舎人どもは、互いに頷きあった。一人は残って扉に耳をつけ、一人は廊を駆けて、室の裏手に回った。

「皇后よ、吾が意を陳べ奉る」

皇子は、皇后に向き合って坐した。

「天皇の崩御されて後も、しばしは称制を続けたまえ」

「吾は……」

皇后は言った。

「天皇がおわしてこそその御稜威。吾独りにては、誰も随うまい」

「否」

皇子は声を潜めて言った。

「天皇の高御座を継ぐべきは大友皇子、されど、皇子は百済人。いま少し、皇后の称制の下にて、

太政大臣として善政を積ませたまうべきかと」

「皇子よ」

皇后は、まなじり 毗をやや上げ、膝を進めた。

「もし、吾が大海人皇子にこそ、高御座を譲るべきと言え、如何」

扉に耳をつけ、皇后の寝屋の裡を聞いていた舍人は、腰の剣に手をかけた。

皇子に邪心よしまなこころあると見れば、躊躇わず討て。

さらに、皇后をも討て。

二人を討ち、皇子が乱心して皇后を弑殺しいきつし奉り、しかる後に汝等なれに打たれたかのごとく装え。蘇我果安の言葉を、舍人は口のなかで繰り返していた。

「皇后よ」

大海人皇子は言った。

「吾に、日本を統すべよ、と詔みことのりされるや」

さらば……。面差しを引き締め、皇子は懐ふところから短剣を取り出した。

寝屋の裏手に潜み、小さく穿うがった穴から覗いていた舍人は、息を呑んだ。

吾等が手を下すまでもなく、皇子は皇后を弑殺し奉るとの意か。

ならば、後は容易たやすい。

そうつぶやき、舍人は、その背後にかすかな足音を聞いた。

振り向いた。齢は十七ばかりか、痩せて剛こゝろげな面差しの乙女が立っていた。

乙女の膝が、舍人の股間を襲った。身の下半分が破裂し、四肢が凍り、舍人は意識を失った。

「吾は、国を統べる器うつわにあらず」

大海人皇子は、いぶかしげに小首をかしげ、乙女の頃のように口を半ば開いて見つめる皇后を

前に、結い上げた髪に短剣を刺し、引き抜いた。

鬢みづらが落ち、さんばらに放たれた髪が、皇子の額や肩を覆った。

合図がない……。

扉の外で耳を済ませていた舍人は焦った。踏み込むべき時になれば、寝屋の裏手の壁の穴から覗いているもう一人の舍人が、鳥の鳴き真似をして、報せるはず。

しかし、響いてくるのは、寝屋の裡の、皇后と皇子の問答のみ。

「皇子よ」

皇后は、首をかしげたまま問うた。

「髪を切ったは、何の意ぞ」

「厨戸皇子うまやどののみこ、曰いわく」

皇子は応えた。

「世間虚仮、唯仏是真（世の中は虚偽、ただ、仏道のみが真実）。されば吾も、俗世との縁を断ち、仏の道を修めたく、出家する」
「何故に」

惚けた面差しで問う皇后に、皇子は立ち上がり叫んだ。

「吾が、俗世にあれば、天皇の崩御したまう後、必ず大友皇子との間に軍が興る」
叫んで皇子は叩頭した。

「皇后よ、この場にて、吾が髪をことごとく剃りたまえ」

意外な成り行きを、息を潜めて聞いていた扉の外の舎人は、不意に襲ってきた股間の痛みに、四肢を強張らせた。

舎人の背後に、十五ほどの乙女が立ち、尻から手を差し入れ、舎人のふぐりを掴んでいた。

「声を出すな」

川のせせらぎのような、伸びやかな声音であった。

「踵を返し、こちらを向け」

舎人はびくりと振るえ、おそるおそる振り向いた。

乙女は、こちらに軀を向けた舎人の股間を、膝で蹴り上げた。

舎人は、静かにくずおれた。

寢殿の門前に、俯いて歩き回る中臣金と、玉砂利に腰をおろして書を読む蘇我果安の姿があつ

た。

「遅い」

中臣金は、吐き棄てるように呟き、空を仰いだ。

「もはや日は沖天に昇った。何故、いまだ報せがない」

「焦らずともよい」

蘇我果安は、冷やかな笑みを浮かべて応えた。

「あの舎人ども、百済にては、幾十を誅殺した者どもと、大友皇子が選ばれた。しくじることはあるまい」

「されど」

膝を突いて果安に詰め寄った金の背後で、門の扉が重く開いた。

振り向いた二人は、息を呑んだ。

立っていたのは、大海人皇子。その頭は、髪を剃り落とした僧形であった。皇子の背後に立

つ皇后は、笑みを浮かべて言った。

「皇子は、吾が手で出家したまい、これより吉野にて仏の道を修行したまうとのこと。卿等、お送りし奉れ」

果安と金は、貌を見合わせた。皇后は続けた。

「皇子は、飛鳥の留守司を辞したもうた。代わりの留守司が派されれば、河辺宮と兵器をすべて、内裏に返納され、吉野宮へと遷られる。よろしく手配すべし」

皇子は皇后に拝礼し、強張った面差しで跪く果安と金を見やって言った。

「吾を案内した舎人の方々……」

果安の肩がびくりと動いた。金は唇を振るわせた。

「室の外に控えているはずが、何時しかいなくなっていた。皇后御自ら、吾をここまで案内したもうた」

「それは……」

金がやつと貌を上げ、卑しげな笑みをつくつて応えた。

「厳しく譴責する故、御赦しを……」

「否。是非もない用でもあったのである。寛大に措置されよ」

皇子は、ふたたび皇后に拝礼し、南門に向かって歩み始めた。果安と金が、慌てて後を追った。剃り上げた頭をまっすぐに上げ、ゆつくりと歩む皇子の背後で、果安が左右を見やった。人影はない。喉をならして固唾を呑み、その右手が懐に差し入れられた。

金が慌てて袖を引いた。果安は懐に手を入れ、短剣の束を握ったまま、金をにらみつけた。金は激しく首を振った。

いま討たねば……。

果安は、面差しを歪めて金を威嚇した。

否……。

金は、果安の袖を掴んで離さなかった。

皇后をも共に討たねば、吾等はただ、皇子を弑殺した謀叛の徒として罰せられるのみ。されど……。

果安が懐の手を引き抜こうとしたとき、軽やかに玉砂利を鳴らして、駆け来る沓音が響いた。果実は弾かれたように、懐の裡で剣の束から手を離し、金は振り向いた。二人の女孀が、左右に車輪の着いた輿を重げに引いて、こちらに向かっていった。輿の上には、大きな木組みの函が載っている。

女孀どもは、皇子の前に拝跪し、言った。

「皇后より、袈裟、仏具一式、それに、百済の仏師に鑄させた如来像を、皇子に賜うとのこと」

吾等に、今宵の宿まで届け奉るようにとの詔である。二人の女孀は、かわるがわる言った。皇子は、寝殿に向かって拝礼し、頷いた。

やがて、皇子は、二人の女孀と、函を載せた輿とともに、南門をくぐった。待ち受けていた舎人や壮丁が群がり、やがて列をなして大路を去っていった。

「虎に翼をつけて……」

南門で見送っていた果安が歯噛みした。

「野に放ってしまった」

人垣に見守られ、大路を過ぎながら、大海人皇子は、壮丁どもとともに木函の載った輿を引く女孀どもに問うた。

「かの舎人どもは、その函の裡に……？」

女孀——土蜘蛛の結奈は頷き、傍らの瀬莉を見やった。十五の瀬莉は、得意げに笑みを浮かべて馬上の皇子を見上げている。

大海人皇子が内裏を訪なう二日の前より、二人の土蜘蛛は寢殿に忍んだ。大友皇子の意を受け、果安と金が、百濟人の舍人をして皇后と大海人皇子を討たせるとの謀は、すでに知れていた。「二人とも、よくぞし得た」

大海人皇子は言い、いまだ稚ない土蜘蛛どもは、ますます嬉しげに笑みを弾けさせた。瀬莉は問うた。

「この函は、如何する？」

「封を解かぬまま箸墓へ運べ」

大海人皇子は応えた。

「鏡郎女に伝えよ。舍人ども、責めるはよいが、殺すな、と」

「諾」

土蜘蛛どもは頷いた。

ふと、皇子は人垣を見やった。

伴部の装りをした額田郎女が、大路に面した官衙の壁に背をもたせかけ、皇子を見上げていた。

乙女のような笑みを浮かべ、右手を己の後頭部に当てた。皇子は笑みを返し、剃り上げた頭を撫でた。

「舍人どもの行方が分からぬと？」

大友皇子の宮に、蘇我果安と中臣金が、息を弾ませ、蒼惶として駆け込んだのは、その日の夕方であった。

「何故？ し損じたのは、彼等が臆して逃げたからか？」

苛立つて喚く大友皇子に、果安と金は、首をすくめて貌を見合わせるのみであった。かの二人を討手に選んだのは、大友皇子ではないか……。

「されど……」

蘇我果安は言った。

「幸い、皇后にも他の妃の方々も、此度の謀には気づきたまわぬ御様子。改めて策を練り……」

「大海人皇子はいずくに？」

大友皇子は問うた。金が応えた。

「今宵は梵釈寺にて泊まり、明朝、飛鳥へ発ちたまうとのこと」

「梵釈寺か……」

皇后が建立させた寺、僧どもも皇后に縁深い。討手を放つわけにもゆかぬ。大友皇子はいまいましげに吐き捨てた。

「むしろ今は……」

果安が言った。

「二人の舍人を捜し出し、何があつたかを聞くが肝要かと……」

「あ！」

不意に中臣金が叫んだ。皇子と果安が見やると、金は貌を蒼ざめさせ、膝が細かく震えていた。果安が問うた。

「如何した？」

「土蜘蛛だ……」

「土蜘蛛？」

「土蜘蛛が、吾等の謀を知り、皇后と皇子を守り奉り、かの舎人どもを拉致つたとすれば……」

「あ！」

果安も叫んだ。

「では……あの、女婦どもが……運んでいたのは……」

「すなわち討手の舎人どもは……」

「大海人皇子の掌中に……」

二日後の夜。

大物主の神の依ります聖域として崇められた三輪山の麓、一里（約540メートル）四方の大池の中央に浮かぶ箸墓と呼ばれる塚は、かつて多くの土蜘蛛の住まう地として畏れられていた。その頃は、池の端に柵が巡らされ、小さな門前には陵戸どもが二人、寝ずの番をして人の出入りを禁じていた。

しかし、土蜘蛛の悉くが宝大王の筑紫親征に随行し、そのほとんどが白村江の軍で滅んだ後は、ただひたすらに荒れ果て、草木の茂るに任せていた。むろん、塚を守る陵戸も置かれず、人の踏み入った気配すらなかった。

その橋墓の池に小舟を浮かべ、塚に漕ぎ寄せたのは、讃良皇女であった。

塚には、かつて、土蜘蛛が寝起きしていた横穴が、幾つも穿たれている。その横穴に入ると、

狭い通路が地下深くまで伸びていた。

讃良皇女は、灯火を点けた皿を手に、背をかかめて静かに通路をつたい、やや広げな室に出た。

「彼等は、喋ったか？」

讃良皇女は、衣をすべて剥かれ、裸身で両手を後ろ手に縛られ、壁際に臥せて呻く二人の舎人を見やうて問うた。

「すべて語った」

鏡郎女は、坐したまま皇女を見上げ、笑みを浮かべた。

「土蜘蛛の責めに、耐えられる者はいない」

その傍らで、土蜘蛛の繭環が、貌や胸に浴びた返り血を、静かに布で拭っていた。

大友皇子に命ぜられ、倭媛皇后と大海人皇子を共に討とうとした舎人どもは、貌は赤黒く腫れあがり、胸や腹は無数の蚯蚓腫れと傷に覆われ、なかでも、ふぐりが瓜のように腫れ上がり、陰囊を圧していた。

「殺してはいない。死なぬよう、手は緩めた」

穏やかに言う鏡郎女に、讃良皇女はわずかに貌を擧め、大海人皇子の言を伝えた。

「この舎人ども、しばし箸墓にて養うようにとのこと」

鏡郎女は頷いた。

他ならぬ討手に選ばれた彼等の口から謀が漏れば、大友皇子をはじめ、果安や金らも大逆の罪に問われることになる。手元に留めておけば、近江側も迂闊には手を出せまい。

「皇子はすでに、吉野に発たれたのか？」

鏡郎女の問いに、讚良皇女は頷いた。

「吾は二日後、新たな留守司に河辺宮を渡して後、草壁皇子らを伴い、吉野へ行く」

河辺宮には、讚良皇女が生んだ九歳の草壁皇子の他にも御子が住んでいた。かつて有馬皇子の異母妹で、後に大田皇女と改めた小足皇女の子である八歳の大津皇子。宍人臣の娘に生ませた五歳の忍壁皇子。

胸形臣の娘との間になした十七歳の高市皇子は、十市皇女とともに近江にある。

「新たな留守司は？」

「高坂王」

王とは、かつての百済王家に列する男子で、百済が滅びて後、大和に逃れ来った者を指す。

「大友皇子のやりようのまずさよ」

鏡郎女は冷たく笑った。

「大伴吹負をはじめ、飛鳥に留まった豪族どもが、百済人に易々と随うはずもなし」

眼差しを繭環に向け、鏡郎女は命じた。高坂王の妻どもを調べよ。王の好みに合う土蜘蛛を、

留守司の女孀として潜ませよう。繭環は頷いた。

「讚良皇女よ」

膝を改めた鏡郎女に、讚良は面差しを引き締めた。

「吉野に着いて後は、宮に籠もり、外には出づるな。留守司は、必ず、吉野宮を厳しく見張る。皇女が、吾等と共にあると知られれば、さきざき、妨げとなる」

讚良は頷き、しばし頭を垂れ、呟くように言った。

「しばし、汝とも逢えぬの」

「軍に勝つまでは」

「勝てるか」

「勝てる」

鏡郎女は微笑んだ。

「土蜘蛛が味方して、敗れたことはない」

「鏡郎女よ」

讚良皇女は貌を上げた。

「汝には、助けられた」

「礼は要らぬ」

「軍に勝った折りは、必ず、汝の罪を赦し、官位を賜うよう、皇子を説く」

「官位など要らぬ」

鏡郎女は、繭環を見やって言った。

「土蜘蛛どもが、安穩と暮らせる場を賜れば、それでよし。吾が罪は、然るべく裁け」

「されど……」

「それよりも問いたいことがある」

笑みを収め、鏡郎女は問うた。

「軍に勝ちて後、汝は如何、日本を統べるぞ」

「吾が……」

讚良皇女は口ごもった。

「統べるのではない」

「かの皇子は……」

鏡郎女は続けた。

「独りで事を決め、動く人ではない。必ず輔けが要る。即ち、皇女の策が、日本を統べることとなる」

しばし首を傾げ、讚良皇女は口を開いた。

「唐の法式に倣うよりあるまい」

「何故に？」

「大和では、群臣の議によって次の大王を決めてきた。それ故、争いが起こり、時に軍が興った。この旧弊を正すには、法を以て高御座を継ぐべき御方をあらかじめ定めねばならぬ」

ただし……。皇女は続けた。

「唐の風を倣うことに急ぎすぎ、それ故に中小の豪族どもを怒らせた近江の轍は踏まぬ。大和の風に合った、日本のみの律令を、時をかけて定める。やがては唐と同じく、民は豪族の私に有するものではなく、天皇に属する公民となり、等しく口分田を与えられ、等しく兵役を課され、等しく法の下に裁かれる。天下の民が等しく天皇の民となれば、豪族どもの争うことも絶えよう」

「それしか、あるまいの」

鏡郎女は面差しを寂しげに俯かせた。

「思えば、かつての豊日大王、宝大王、葛城皇子、そして大友皇子……。彼等が築こうとした国のありようと、汝が思い描く国のありようは、そうは違わぬのかもしれない。三十年近く、己が手を血で穢し、多くの罪を重ね、今また、軍乱を興す。その挙げ句が……」

「気に入らぬというのか」

かすかに怒気を含んで問う讚良皇女に、鏡郎女は微笑んで首を振った。

「否。今、希むは、吾が手で招いた乱れを、平らかに治めることのみ。汝等ならば……」

鏡郎女は、手のない腕を伸ばし、いとおしげに讚良皇女の頬を撫でた。

「それもかなえられよう」

十二月となった。

寒……。

冷たい朝の気に目覚めた倭媛皇后は、褥を出で、軽く欠伸を漏らし、室の窓を開けた。

内裏の庭は、一面、白く覆われていた。

「雪！」

皇后は手を叩いて飛び上がり、女童のようにはしゃいだ。

慌ただしく足音が響き、女孺どもが入ってきた。

「如何した？」

訝しげに問う皇后に、女孺どもは口々に喚いた。

「天皇が……」

彼女らの唇は蒼く、震えていた。
「崩御したまい……」

その頃。

吉野の峯々もまた、雪に覆われていた。
いまは亡き蘇我鞍作、そして中臣鎌子。彼等と初めて逢ったのも、この吉野宮であった……。
宮の庭では、大津皇子、草壁皇子、忍壁皇子、稚ない皇子たちが、雪を丸めて投げ合っていた。
伊勢から呼ばれて飛鳥に入る前、この宮に留まったのも、やはり十二月。飛鳥では、山背皇子と、蘇我鞍作と古人皇子との間に軍が興り、それを避けるため一月ばかり、この山中の宮で過ごした。今は近江にあつて右大臣となつた中臣金が、ずっと皇子の側に侍っていた。
あれから二十七年か……。

常には遠くに響く滝の音も聞こえてはこなかった。滝も凍つたのか。

前の月、すなわち十一月、唐より郭務惊らが五十の船に二千を率いて筑紫に着いた。唐使は、病に臥した天皇に見舞いの品を届けるため、と告げたが、如何に対応するか、近江では連日、朝議が催されている。

阿倍比羅夫に、同数の船を率いて筑紫に向かうよう詔が下された。あくまでも軍は避け、十分に談合すべし、と命ぜられ、比羅夫は筑紫へと発つた。

阿倍比羅夫は、近江の北、越を本貫としている。近江と戦うにあたり、もつとも妨げとなるであろう比羅夫の水軍が筑紫に派された。とはいえ、唐の水軍が筑紫にある間、軍を興すわけにも

ゆかぬ。大和の裡が乱れば、唐の介入を招く。

天皇は崩御し、天智と諡された。しばし倭媛皇后が称制を続けることとなつた。皇后は軍は好むまい、大友皇子とて、唐使が去るまで兵は動かせられまい。

唐使が去つた時。

その時こそ……。

降り続く吉野の雪を見つめつつ、大海人皇子は呟いた。

日本を吾が手に……。

吾が手に収めて……何をしようというのだろうか？

そう思い至り、萎えかけた心を、大海人皇子は励ました。

強くあれ。

吾が愛で、吾が慈しみ、吾と睦み、吾を慕う者すべてのために。

(第五部・了)